

11月の竣工、翌年3月の開院に向けて
工事の進捗状況などをお知らせします!



令和8年5月24日

<お問合せ先>

野洲病院新病院整備課

小篠原 1094 番地

077-587-6141

chiikiiryu@city.yasu.lg.

令和9年3月の新病院の開院に向けて、工事は順調に進んでいます!

◆◆『市立野洲地域医療センター』建物の全景が現れてきました ◆◆

令和9年3月に開院する「市立野洲地域医療センター」の工事は順調に進んでいます。

現在は外装工事・内装工事を行っています。このあと、建物の外構や駐車場間の連絡通路、新しい市道など、周辺部の整備を進め、10月頃には工事が終了する予定です。



(4月16日 ドローンによる撮影)

◆◆ 新病院内にモデル病室が完成 医療スタッフが視察しました ◆◆

去る4月14日、外壁や内装の工事が進む新病院の構内に造られたモデルルームを、病院長ほか病院スタッフが訪れ、実際の設備や動線に問題がないかなどをチェックしました。

視察したりハビリテーションの専門スタッフは、手すりの微妙な位置

など、図面からは分からないことを確認し、

より良い施設の完成に向けて、工事担当者に変更を提案するなどしました。

この視察会に臨んだ前川病院長は、「ここまでたどり着けたのは、野洲の地域医療について、今まで多くの方々が真剣に考えてこられた成果だと思う。新病院の整備は、野洲市民の念願であり希望である。職員として、市民の念願、希望に応えられる病院づくりを進めていきたい。」と、改めて決意を表明しました。



(工事中の構内の模様)



(工事中の構内に先行して作られたモデル病室を確認する病院スタッフ)

<裏面に続く>

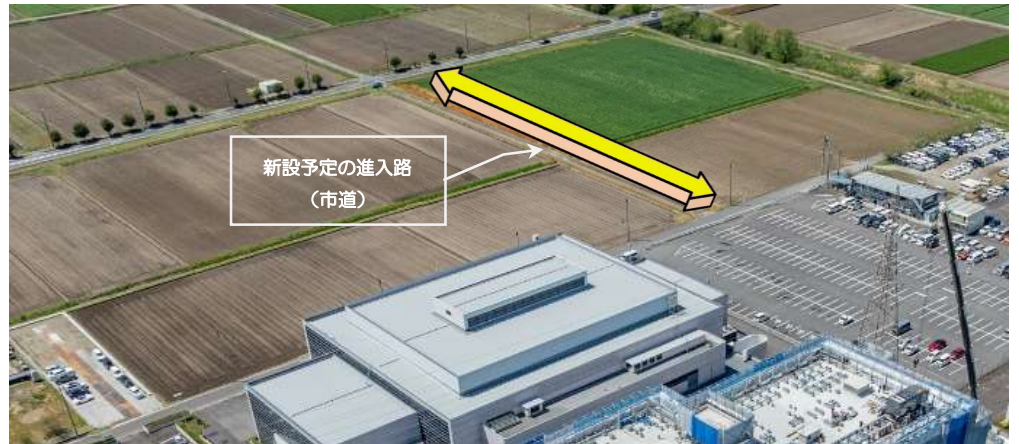


(病棟となるフロアーからの眺め 4/14)

今回の視察会では、病棟となるフロアーからのすぐれた景観も確認できました。4階から6階までの各病棟から南方面では、美しい三上山を望むことができました(上の写真)。また、北方面を望むと、比良・比叡の山並みや、うっすらと琵琶湖の湖面を見ることもできました。ふるさとを望める静かな場所で、野洲市民・患者さんが、落ち着いた心持ちで安心して療養し、リハビリや治療に取り組んでいただけることと思います。

◆◆ 総合体育館の第2駐車場(裏手)へ繋がる市道を新設します ◆◆

体育館裏手の第2駐車場の出入をスムーズにするとともに、中里学区方面からの新病院へのアクセスをよくするため、新しい道路を整備します。新設される道路は、市道で幅6メートル、並行する農道を歩道に兼ねることから、人も車もスムーズ・安全に通行していただけます。これまでの市道・市三宅小南線からの出入と合わせてご利用いただくことで、新病院へのアクセスがより便利になります。



新設予定の進入路
(市道)

----- 歴史の井戸辺 医事に関わる野洲の歴史散策 第8回 -----

北村宗龍^{そうのりゅう}は、師匠の曲直瀬道三^{まなせどうさん}が毛利家と関わりのあったことから、毛利元就^{もとなり}の八男・元康^{もとやす}(1560~1601。現・広島県安芸高田市生まれ)の侍医になったと伝わる。宗龍は元康と、連歌のやり取りをするまでの間柄になっていった。

元康には亀寿丸という、1598年2月生まれの子がいた。その子の養育を宗龍は担ったという。5月23日に元康が宗龍へ宛てた手紙には、百日の祝儀として、宗龍に銀20両が送られたとある。その3ヶ月後の8月中旬、亀寿丸は病に臥した。9月には発疹が現れるほど、症状は悪化していった。9月12日、宗龍は曲直瀬玄朔^{げんさく}(二代目・曲直瀬道三)に宛て、亀寿丸の容態を記した手紙を出している。手紙を診た玄朔は治療法を朱書きし宗龍へと送り返した。なんと、曲直瀬門下は、玄朔のもとに患者を集めるのではなく、地域に医師を派遣して診療する体制をつくっていたのである。その体制の一翼を、宗龍は担っていた。

なお、亀寿丸はその後無事に快復したようである。かの毛利元宣^{もとのぶ}こそ、亀寿丸その人であった。



大津城跡(大津市)

関ヶ原の合戦の際、西軍の元康は、大津城に攻め込んでいた。

【参考文献】

- ・宮本義己「戦国期毛利氏領国における医療体制刷新の実相—一曲直瀬道三の医術教導と元就の医道伝受」(『帝京史学』第8号、1993年)
- ・大谷雅彦編著『北村宗龍 埋もれていた近江の医聖』1986年
- ・野洲町史編纂委員会編『野洲町史 通史編』1989年